

統一

第七十九號

目次

年頭の感
 修學の心得
 實在の意識に就て
 信仰の人及び其他
 精神的大元帥としての聖日蓮
 活動の羅針盤
 我徒の抱負
 寄 書
 憤 悱 錄
 報 道 廣 告 等

本多日生
 今成乾隨
 笹川真應
 石川顯隆
 吉田堅晴
 中原通應
 篁 堂
 影山謙二

年頭の感

本多日生

人うちはりにくむとも法重ければ弘まらるべしとは、是れ我統一軍に於ける堂々の正令にあらずや、光輝ある宣言にあらずや、年頭の感慨として吾曹を鞭撻し策勵し、亦能く一閃彼岸の光明を認めしむるは、實に我軍の天分と榮光ある將來とにあらずや

世人の新年を祝するは、消へ行く歳晚を送くりて更に新たなる一年を迎へ、何等かの功業を成し遂げ得べきを認めて、一年の將來を祝する也、されば新年を迎ふるとも、將來の希望を有せざる者は、その祝すべき所以を見ず、縦し區々たる欲望を有するとも、若し夫れ一生を貫ける主義なく理想なき者は、又その祝すべき所以の意義を有せず、又縦し奉持する所の主義理想ありとするも、その主義理想にして將來に光明と活力とを有するなくんば、斷じて新年の祝すべき所以を見ざ

る也

新年に入りて人々相逢ふ毎に祝詞を交換す、老となく幼となく、賢となく愚となく、何人も嬉々として之を祝せざるはなし、されど彼等にして區々たる希望の外に、一生を貫ける主義を奉じて、將來の榮光を祝し得る者、果して幾人かある、劣等なる欲望の外に、不朽の信念を抱いて、將來の向上を祝し得る者、嗚呼果して幾人かある、彼等の中には固執迷想の爲めに、枯死せんとする主義を頑守し、滅亡に近づける理想を抱いて、切りに將來を妄想し、前説を夢みるはあらん、主義を求めて得ず、理想を逐ふて安んぜざるはあらん、然れども能く不朽の主義を奉じて、將來の榮光を有する者に至りては、寔に曉天の星の如く、爪上の土の如けん、之を思へば豈感慨なきを得んや

人生祝すべきの事皆に新年のみならず、誕生を祝し成人を祝し、婚禮を祝し成功を祝す、されど祝すべき所

以の意義を有せざるは、新年を祝するに意義を有するの妙さといふならず、蓋し主義なく將來なくんば、百般の人事概して祝すべき所以の意義あらざる也

天地の清明を祝し、人文の發達を祝し、國家の隆運を祝し、家門の榮昌を祝し、個々の健全を祝す、祝するは寔に良し、只夫れ天地清明なるも、そこに三世を貫き、十方に亘りて滅びざる道徳的規律の嚴存し、激濁たる圓慈の六合に瀰漫せるを認めされば、その祝する所以は夢幻のみ、人文の發達を祝するも、その發達にして東西に通じ、貴賤を擧げて身心法悦の生活に入らしむるなくんば、その祝する所以は皮相のみ、國家の隆運を祝するも、その隆運にして國民を導ひて卓越せる人格を養ひ、經濟と武力との上に、優に世界に惠澤を與ふる徳風を發揚するなくんば、その祝する所以は泡沫のみ、家門の榮昌を祝するも、その一門に善良なる家憲なく、信念理想の尊重すべきなくんば、その榮昌は偶々以て子孫を賦するに止まり、その祝すべき所

以を認めず、個々の健全を祝するも、その健全にして神精的の光明なく、活動の見るべきなくんば、之を祝する畢竟俗見のみ、要するに大主義大理想の根底なくしては、天地の清明祝するに足らず、人文の發達祝するに足らず、國家の隆運祝するに足らず、家門の榮昌祝するに足らず、個々の健全も亦斷じて祝するに足らざる也

人うちばかりにくひと法重ければ弘まるべしと、嗚呼盛んなる哉我統一軍の正令、凜として聲あり、赫として光あり、夫れ教菩薩法の妙法華經と萬年廣布の統一主義とは、猪金山を摺つて光耀益輝き、歲霜雪を送つて松柏色を加ふるが如く、圓慈の妙觀は天地清明の間に懸りて、紫雲の靉靄たるが如く、愛無偏黨の慈光は上下貴賤を掩ふて、各得増長の法悦を與へ、立正安國の活論は昭乎として國民の頭上に輝きつ、日輪の東天に昇るに似たり、謗法惡律儀の家を悲しみ、正法正義の安宅に居らしむ、廠の實よりは身の實、身の實よりは

心の寶の尊むべきを教へて、健全なる身體と共に健全なる精神を養はしむ、嗚呼盛んなる哉我統一軍の正令、凜として聲あり、赫として光あり、斯くて個人の健全大に祝すべく、家門の榮昌大に祝すべく、國家の隆運大に祝すべく、人文の發達大に祝すべく、天地の清明更に大に祝すべき也

近時宗教の將來を論ずるの聲盛んにして、聞くに價ひするもの尠からず、唯惜むらくは彼等の多くは、我統一主義の考察を缺失して、所論適從を誤まれるもの、如し、或者は言ふ、二十世紀の文明は哲學と宗教との調和を完成するにあり、知識と信仰との一致を實現するにあり、而して是れ新たに起るべき將來の宗教なりと、或者は言ふ、靈と肉とは二千年間の歴史を掩へる二大思潮にして、今日に至つて未だ解決せられず、この二者を配合して起るものは將來の宗教なりと、或者は言ふ、東西文明の接觸に由りて、汎神的宗教と一神的宗教とは相琢磨し、更に新たな一個の宗教は建設

せらるべしと、或者は言ふ、宗教の神秘的方面は漸次に消滅して、實際的に倫理化すべしと、或者は言ふ、歴史的の宗教は識者の間に厭忌せられ、精神的の宗教之に代はるべしと、これ等の諸説は有力なる主張たるを失はず、吾曹はこれ等の論旨を傾聴せり、傾聴して徐ろに審思考察せり

論者の所謂哲學と宗教とを調和せば、果して如何の宗教を建設し得るか、靈と肉とを併せて尊重する宗教とは、果して如何なるものぞ、汎神と一神とを調和せば如何なる主義を打開し來るべきか、宗教の倫理化は如何なる程度に於て行はるべきか、歴史的形態は如何なる程度に於て改造せられ、精神的宗教は如何なる新形態を造り出すべきか、形態と精神との全然隔離し能はざるは勿論、純理的傾向と形態的傾向とはえれあれども、歴史なく形態なくして、宗教の發達を見らるべき、吾曹の寡聞なるこれ等に關して未だ鮮明なる解説に接せず、適確なる歸趣を與へられざるを遺憾とし、論者

修學の心得

今成乾隨講話
中原通應筆記

左の一篇は本月七日大學林新年宴會の當日林長の講話せられたるものなり

人うちはりにくむとも法重ければ弘まるへしと、嗚呼盛んなる哉我統一軍の正令、凜としし聲あり、赫として光あり、奮勵せよ、努力せよ、我軍の戰士

△佛子我れば、天爵を有し天祿を有し不死の真藥を有す、この尊慶何にものか比すべき、嗚呼この榮譽は佛子を自覺し佛子の勤をなす者に、所有の權利あり、佛子の勤をなさざる者は、この榮譽の權利を放棄する者である

△佛子汝は如何にして佛子となり、その名を辱しめざる、されば、慈悲の心を持ち、善行をなし、正信に止まり、佛陀に歸念せらるゝあれば、即ち佛子となることを得らるゝならん

してそれを大成すれば成功することになるのである

諸君の初發心が如何なる目的であつたかと云ふに云ふ迄もなく、宗教界に身命を捧げ、心靈界の光となる覺悟であつたことは今更改めて言ふを俟たざる次第である、心靈界の光となるに就ては、佛陀出世の本懐たる法華經壽量品を信得するのが第一義であるけれども、これを會得するの準備として、またこれを發揮するの資料として、百科の學を研究するの必要があるのである、されば諸君もその根本と資料との本末輕重を忘却せざる様心掛けて居らねばなりません、豫てお話しせし如く、諸君は卵の様なものである、卵には白味も黄味もあるが、然しこれは滋養分即ち資料である、黄味の所に、俗に所謂目即ち核といふものがある、これが生命である、この核が發育するに従つて、黄味や白味を吸収して初めて孵化し飛揚するのである、諸君の初發心即ち信念は、核の如く百科の學は白味黄味の如く卒業の曉、社會に活動し、心靈界の光となるは、卵の孵化し飛揚するが如きものである、若し卵にして

昨日と過ぎ今日と暮しつ飛鳥川流れてはやき月日なりけり、といふ古歌があるが、早や明治四十三年の春を迎へた譯である、歳月は流水の如く一度去つて又歸らずで、うか／＼して居る中に、紅顔の美少年が白頭翁となるが如く、今日の沙彌が瞬間の中に、老僧と化する譯であるされば、諸君も寸陰を惜み一定不變の目的の下に突進するの覺悟を持たねばなりません、世間多くの青年は、勉強しつゝある間に自分の目的を立つる譯であるが、諸君はそれと趣きを異にして、沙門となるの當時即ち初發心の時既に業に一定不變の目的が確立せられてある譯である、されば、今更新しく志を立つるの必要なく、初發心の志が終始一貫

黄味や白味が完全であつても、其生命たる核が發育する力がなかつたならば腐敗してしまふのである、その如く諸君の學びつゝある百科の學が如何に優等であつても其生命たる信念の増進することがなかつたならば百科の學は凡べて歸趨する所を失ひ、宗教家として何等の價値なきものとなつてしまふのである、諸宗諸派の學生の中、間々學術進歩と共に宗教家たることを厭ひ、世間の學者と伍して得意然たるものがあるが、彼等は元來宗教の根本義に向つて發心せしものにあらずれば、敢て怪むに足らざるも、我宗の學生は、如何なる誘惑に遭遇することあるも、斷々乎として初一念を遂行するの覺悟を忘れてはなりません、萬一身宗教家たることを恥づるものありとせば、宗教家の資格を自覺せざるの致す所である、諸君に對し如斯言をなすは、徒勞に過ぎざるも、尋てを以て一言を演べよう、世の中の有ゆる職分の中に、宗教家程神聖なるものはないのである、然るに世間が宗教家に對し尊敬を拂ふこと少く、従つて宗教家それ自身も、宗教家なりと揚言す

ることを憚るの傾きあるは宗教家の假面を被りて、徒らに信條を食ふからである、祖師の所謂「法師の皮を着たる畜生なり法師の名を盗める盗人なり」の徒輩が多いからである、この畜生法師てさへも世間が輕侮しつゝ尚且つ供養するといふものは、祖師開山及び先聖の餘徳とは云へ、實力以上の尊敬を受けつゝあるのである、況んや名實相應せる宗教家となつたならば、世人が如何に多大の尊敬を拂ふに至るかは豫想外であると思ふ、假りに、尊敬を受けざるにもせよ、又侮辱を被るにもせよ、宗教家の天職を自覺し、佛子の本分を會得したる以上は、精神上の平和より生ずる法悦は、身王候となり、世界の富を左右するよりも、百千萬倍の勝れたるものがあるのである、世間には、政治家、學者、實業家、其他種々の職務に盡すもの多々あるけれども、宗教家の精神的報酬に比すれば雲泥の差があるのである、殊に我日本國を始め、世界各國に、幾多の政治家も學者も實業家もあるからして、十人や二十人の人々の増減は、何等の損得もないのである、然し

ながら、心靈界の光を以て任ずる人々は、曉天の星の如く、實に寂々寥々たるものである、殊に我國に於ては、日露の大戦役を了へ、幾多の悲惨は、各階級に演ぜられ、國民亦生活難に苦しみ、煩悶懊惱その極に達し、神聖なる宗教の慰安を求めつゝあるは、争ふべからざる事實である、此時期に際し本佛の大慈悲を感受し、妙法を宣傳し、心靈界に向つて光を點するに於ては、凡ての國民が精神の根底に於て偉大なる力を得、新生命を發揮し、各々その職分に對つて奮勵努力し、國威民福を發揚する亦決して難きことなからうと信するのである

予は諸君に對し、忠實に百科の學を修むることを望むも、學者を以て終らんことを欲しないのである、世間の學者は、往々學問の切實をして得意然たるものあるも、彼等は最も憐むべきものである、諸君は、報酬を求むるが如き卑劣なる精神を夢にだも想ふことなく一意専心、本佛の愛子たることを自覺し、心靈界の光となりて、貴賤上下の別なく、一切の人類を救濟する

の覺悟を要すのである

百科の學研究の度進むに隨つて、諸君の信念に對し動搖を來すことなきにしもあらず、これ尤も警戒を要すべき時である、斯る場合に際しては、毒量品を以て信念の中堅となし、百科の學を開顯し、以て資料となすの覺悟がなければならぬ、一見頑強の嫌なきにあらざるも、如是にして始めて百科の學問は神聖なる信念を稱翼し、又信意に附隨せる排澁物が洗滌せられるのである

のであります

向修養の心得及び將來活動の素地を作ることになつてお話ししたいこともあるが、また時機を俟つて演べることと致します

また諸君が佛教各宗及び外教書籍を見、又是等の説を聞いて心に感ずることもありませう、此場合には毒量品及び開目抄等を標準として批判し、取つて我が物とするの覺悟が必要であります、徒らに異教徒の淺薄なる教訓の捕虜となりて本佛の愛子たることを忘却する様なことがあつては、不孝の重罪を犯すことになるのであります、治世語言資生業等皆順正法で、百科の學も皆毒量品を光顯することになり、また外教乃至一切の佛教皆毒量品に開顯せられて始めて用をなす

然るに人皆經文に背き、世悉く法に迷へり、汝何ぞ惡友の教へに隨はんや、されば邪師の法を信し受る者なきて毒を飲む者也といふ (聖經)

實在の意識に就て

笹川 眞 應

(一)

人生々活の眞意義を了解して、吾人の本領と靈性を發揮するは、吾人が人としての尤も盡すべき要務であると思ふ、吾人は患難に生きて安樂に死するの覺悟がなければならぬ、吾人の頭に戴く所の教祖を始め先師先哲は、何れも救のために患難に處して、その靈性の光と力を發揮せられたのである、吾人が人としての價値は、實に此にあるのである。

されど、愚かなる迷へる多くの人は、人の人たる眞價を發揮することに努めず、空しく肉欲の生活に憧憬れて、靈活の妙味を識らず唯肉に生きて靈性を傷んで居る、この實景は法華經に幾なく寫されてある。

「諸の衆生を見るに、生老病死憂悲苦惱に燒煮せられ、亦五欲財利を以ての故に種々の苦を受く、又貪著し追求するを以ての故に、現には衆苦を受け後に

は地獄餓鬼畜生の苦を受く、若し天上に生れ及び天上にありては、貧苦困苦愛別離苦怨憎會苦、是の如き種々の諸苦あり、衆生その中に没在して、歡喜し遊戯し覺めず知らず驚かず怖れず、亦厭を生ぜず解脱を求めず、此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大苦に遭ふと雖ども、これを以て患となさず」

「人生々活の眞意義を辨へずして、人の靈と力を亡ぼす生活の状態は、遺憾なく描かれて居る、この迷想の暗雲を拂ひ、解脱の月を認めんとするには、如何なる道に寄るべきか

自己を滅却して専心他に倚頼するは斷じて不可である、されど自己を中心として枯淡なる理性を標準とするのも又不可である、物質に關する科學や、自己の理性の發動を中心として學究を事とする哲學は、この問題を解決せしむるの力ない事は、今更述るまでもなく識者の認むる所である、吾人肉體の活動は精神の原動力に支配されるものである、精神の力と光は則ち宗教によりて充實するものなれば、偉大なる力を有する宗

教によりて、吾人々類の靈性と本領を發揮しなければならぬ、これ此の題目を擇し所以である。

(二)

哲學と宗教とは、その出發點を異にせることは、前に述べたる通りで、宗教はドウしても超越せる聖靈の知見に隨順しなければならぬ、哲學は自己の理性に基きて研究を進め、遂に「万有不可解」に終り、又可知界と不可知界を立、物質と精神の兩面を説明するか、最後には得る所なくしてやむ事になる、近來哲學方面の研究は急速の進歩をなし、實在の意識に就ても倫理的實在、圓融實在、現象即實在など、巧妙なる説明をなせども、未だ正確なる的所に到らず、之等の見解を、吾人は稱して理想的實在論なりといふのである、要するに、吾人々類がその本領と靈性を發揮し、終極の目的地に達するは、完全人格の實在を認識し、其の教訓に信順せざるべからず、

(三)

實在の意識は、宗教に於ける、重要な問題である

従つて信仰安心の決定もこれに依つて、確立することを忘るべからず、こゝに其の徑程を述べて、識者の批評を乞ふのである、

我には力あり我には無限の樂あり、我は淨き者なり、我の生活は常住(永遠の意味)なり、との實有の見は、凡ての人の懐く迷想である、この迷想を對破したるは佛教初步の教理である、即ち釋尊は、苦空無常無我的教訓を垂れられた、これを對照すれば左の如くである、

身を淨と思ふものには佛は不淨と説き、三界を樂と思ふものには佛は苦と説き、心を常と思ふものには佛は無常と説き、一切衆生に我ありと思ふものには佛は無我と説く、此の對照は、對機誘引の説明で、更に進んで、理常住となり、事常住となり、遂に實在の意識を完全に認むることになるのである、

この苦空無常無我的説は、更に權大乘の説となり、多身多佛の阿彌陀、大日、藥師等の理想的實在を説かれたるが、何れも抽象的實在にして、耶教に云へる

神の實在と、殆んど異點を認めない、耶蘇教徒が神の實在を顯はす方法として、三位一體説や聖餐又は耶穌の復活昇天を立證として神の實在を意圖せんとするは猶水に畫くの類にしてその空想たるや一日瞭然として争ふ餘地がないものである、

彌陀中心論や大日中心論の如きも、其經典にあるの外、實在を認識するの立證は欠て居る、されば教理と義例と實證との具備せざる實在論は、如何に花を飾るが如き言辞を弄するも、神聖なる宗教として、人生に貢獻する効果は費束ないと斷言するに憚らない、

抽象的實在論は、佛教に謂ふ所の理常住論にして、理想の實在に外ならぬ果して然らば具體的實在論は如何に

(四)

佛經典中最も肝要なる説明は、一は二乗作佛論にして、一は久遠實成論である、二乗作佛の説明に依つて、舍利弗迦葉等が、佛子の本領を自覺したるは之れ即ち空漠たる自己實在を理想的實在に進めたるものと

の十界の因果を説き現す、是即ち本因本果の法門也九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備て眞の十界互具百界千如一念三千なるべし、かうて願れば華嚴經の臺上十方阿含經の小釋迦方等般若の金光明經の阿彌陀佛の大日經等の權佛等は此壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮輪を諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品を知らず水中の月に實月の想ひをなし或は入て取らんと思ひ或は繩をつけてつなぎとめんとす天台云不識天月但觀地月等云云

先説明は久遠實成を開顯せられたる釋迦牟尼佛は、法華經壽量品に、十九出家三十成道の始覺を廢して、我は久遠の本佛也、我は一切衆生の父也、我は永久に實在して救済を息むることなしと宣言せられたるは、具體的實在の根據にして、事常住の實在論の出處は此にある、日蓮上人の教訓は實に穿てり盡せりといはねばならぬ、

これを、イエス、キリスト、が天を仰て神よ、父よ

いはねばならぬ、更に進んで本佛の具體的實在に浴被せられ、我等も完全人格の靈光を認むることになる、久遠實成論は即ち是である、

迷ひける心も晴れぬ月影に求めぬ玉や袖に移りし、淺薄なる實在意識の一二階級の進みて、自己の靈、自己の心を認めたのは卅歌に意味が籠つて居る、

教理と現實の調和に依つて、實在を認識するにあらざれば、所謂抽象的になり、空想的になる、耶蘇教の神や大日如來阿彌陀如來等の實在を意圖するものは、恰も群狼が水中の月を取らんとするが如き迷想に陥る病的である、

日蓮聖人の實在意識に對する見解は、左の文章にその一斑を光顯されて居る、

「また發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず二乗作佛も定らず水中の月を見るが如し、根なし草の波上に浮ぶるに似たり、本門に至りて始成正覺を破れば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ爾前通門の十界の因果を打ち破て本門と懺悔れ、而も向父子關係の圓熟せる倫理觀は、耶蘇教にありと誇るものと、全一に比較すべきでない、又大日如來や彌陀如來の實在を意圖し、其恩寵を受けんとするが如き淺薄なる思想とは、天地雲壤の相違がある、

(五)

前に述べたる如く、實在の意識は、宗教に於ける重要な問題で従つて信仰の活力も、人生々活の妙味もこれが根據たる實在を完全に意識するにあらざれば、決して宗教感化の功果は擧るべきでない、更に日蓮上人の實在を意圖し、完全なる信仰の活力を得て、人生々活の妙味を識得すべき教訓を左に紹介しよう

過去遠々の苦は徒にのみうけこし、が、などか暫く不變常住の妙因をうへざらん未來永々の樂はかづゝ心を養ふとも、しむてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず、三界無安猶如火宅は如來の教所以諸法如幻如化は菩薩の詞なり寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし本覺の栢を離れて何事か樂

みなるべし願くば現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ只今生の名聞後世の弄引なるべけれ、須く心を一にして南無妙法蓮花經と我も唱へ他をも勤めんのみぞ今生人界の思出なるべき。(持法華問答抄) この日蓮上人の聖訓は、實在の意識と人生の眞意義とを明かにせられたのである

さらに具體的實在に關する日蓮上人が重要な立證を左に列舉せん、

迹門には但是れ始覺の十界互具を説いて未だ必らずしも本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の圓佛者は悉く始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免るゝを得んや、當に知るべし四教の四佛則ち圓佛となるは且く迹門の所説なり、是の故に無始の本佛を知らず、故に無始無終の義缺けて具足せず、又無始色心常住の義なし、但し是法住法位と説くことは、未來常住にして、これ過去常にはあらざるなり、此の主眼は、抽象的實在を破りて、具體的實在を光顯

るのは、理想と現實の調和したる具體的實在を、意識するの功能といはねばならぬ、
嗚呼、偉なる哉、本佛の靈光、嗚呼、大なる哉、正法の靈耀、之に依つて人生々活の、眞意義を識得し、法悦の靈活を永久に持續せん、

「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等この五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふなり、

したる適切なる教訓である、(本覺本有の十界を明さず故に所化の大衆能化の圓佛皆これ悉く始覺なり)とは、抽象的實在の不備を看破したる適證である、即ち大日彌陀樂師等の實在も、吾人の實在も、根據なき本無今有の空想に擧ることになる、然るに久遠實成事常住の具體的實在の根底確定して、こゝに無始色心常住の義現はれ、我等實在の意義を確證するを得るのである、本佛釋迦牟尼佛は、今も昔に變らず、常寂光の淨土に實在をまします、我等は、濁りなき清き信仰の心に磨かれて、我即是父の御容貌を拜し奉らねばならぬ、

しばしこそ影をもかくせ鷲の山

高根の月はいまもすむなり

本佛常住の極は、近しと雖も、見ることはざるは、信仰の力足らざるに因る、佛子常にその本領を自覺し信仰の活力に依り、本佛の實在を意證せよ、
抽象的實在は、本無今有の常談である、我等は、本佛の慈悲と恩寵に浴し、無始色心常住の靈光を認め得

信仰の人及其他

石川 顯 隆

(一) 信仰の人

信仰の人とは朝から晩まで經典を誦誦する人であらふか、暇ある毎に佛名を唱ふる人であらふか、足繁く寺院や會堂へ參詣する人であらふか、少くとも朝夕嚴格に勤めをする人を云ふのであらふか、否々決してさうではなからふ、信仰の人とは佛陀の慈光の裡に活き、常人の如く怒らず、常人の如く悲しまず、常人の如く苦しまず、常人の如く疾まらずして、常に樂しみ、常に喜び、常に微笑み、悠々として世を過す所の人を云ふのであります、

(二) 神と佛

「自讃の人は神に申しめられ、自遜の人は神に讃められん」とは繁國の聖人トルストイ氏の言である、キリスト教の神は慈愛深き神なることは今更云ふまでもなく、されど氏の言の如く、常に善人を愛して悪人を惡

み、正しきを愛して邪を惡み、恭謙の人を讃めて傲慢の者を卑しめ給ふ傾きがある。佛教の佛陀は之と異なり、善人と共に惡人を愛し、正しきと共に邪を愛し、恭謙の人と共に傲慢の人を愛し給ふことが、宛も大陽の地上を照すが如く、一雨の萬草を潤はすが如く眞に一視同仁である、唯救はるゝと否とは全く吾人の信と不信の差のみであります。

(三) 信仰の妙味

「歡樂極つて哀情多し」と古人が道破せし如く、人は如何なる順境に居ても往々限りなき寂寞の感に打るゝものである、況んや一朝逆境に陥り、自分よりのまらぬ者と思つて居た朋友が意氣揚々として立身するに自分は碌々たる生活を營んで居るとか、或は自分は非常に苦心して立派な事をした積りでも世間はそれほどに見て呉れぬとか、或は親はなくなる妻は死ぬ子供は病む望は遂げられぬと云ふ様な悲惨な不幸が打續く場合には、如何なる人でも殆んど堪へ難い苦痛を感じて、世を怨み人生を果敢なみ失望の淵に沈淪せざるを得ないものである。

得ないのである。

されど若し宗教の信仰に生きて居る人ならば、斯かる時にも、尙ほ怡然たる充實の恵みに浴することが出来るのである、それは何故であるかと云ふに、其の人は如來と共に起き、如來と共に臥し、如來と共に歩、如來と共に語りつゝあるからである、實に如來の與へ給ふ法悦の妙味は、火も焼くこと能はず水も漂はずと能はざる、金剛不壞の力である。

(四) 最高の希望

殆んど總ての人は富を得んと欲して孜孜として働いて居るのである、高位高官に陥らんと欲して身心を勞して居るのである、世間の名譽を求めんと欲して東奔西走日亦足らないのである、されど至誠信仰を求めんと欲する者は甚だ稀である、人々が黄金を熱望するは獎勵すべき事である、位階を渴望するは喜ぶべきことである、世間の名譽を欲するは貴い事である、されど信仰の門に入らんと望むは、それ等以上の尊い事ではなからんか、

人は黄金に依つて常住の平和が得られやうか、位階に依つて永遠の生命が得られやうか、名譽を求むることに依つて一切の劣情を脱離することが出来やうか、日蓮上人が「寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし、本覺の栢を離れて何事か樂しみなるべき」と、この語は決して現實の生活を輕しめたる厭世主義の語にあらず現實の生活をして意義あり根底ある生活たらしめんと欲する聖語たることを忘るべからず、仰せられし一句は恐らく永久否定することの出来ない不壞の眞理であらう、さればたとへ人生百歳の壽を保ち、所願悉く意の儘になるとも、若し信仰の基礎に立たずば、斷じて皮想な生活である、無意味な生涯である、古人が「信仰の一角に參與することを得ば他は亦惜むに足らず」と云ひしは眞に千斤の重みある言葉である。

(五) 不幸者

自分は學者であると思ふものは不幸者である、自分は財産家であると思ふものは不幸者である、自分は徳行家であると思ふものは不幸者である、これらの人は自

己に恃む所があつて、宗教の關門に入ることが出来なからである、宗教の門に入らざれば宇宙の本主を知ることが出来まい、法界の大愛者を感ずることは出来まい、久遠無始の眞の親に觸るゝことは出来まい、若し人にしてこの靈覺を無みするならば、たとへ國王と雖も一個の憐れむべき孤兒ではなからんか、たとへ大富長者と雖も貧窮の一衆生ではなからんか、たとへ世界第一の學者と雖も雖近而不見の生盲ではなからんか、天下に之より大なる不幸者はなからんか、宗教の門は甚だ狭小である、頭の高い人の決して入ることの出来ない門である、傲慢なる者は斷じて窺ふことも許さない、されば宗教の門に入らんと欲せば財産があつても財産をたよりにせず、學問があつても學問を恃みにせず、才能があつても才能を鼻に掛けない人てなければならん、而して謙虛佛陀を慕ふ人にして始めて堂奥に參與する光榮を得るのである。

精神的大元帥としての

聖日蓮

吉田 堅 晴

余元薄識淺學殊に黃口を以てかゝる問題を論ずるは大膽の極みなるを覺えざるにあらざるも頃日開を得、聖語録の一部分を拜讀せしに、圖らずも下陳連せんとするが如き事を感じ、思はしき事、いはぬも腹ふくる心地するにぞ、他の誇りあらんをも憚らず、其一端を披歴すること、はなしぬ。

戰爭嗚呼戰爭といへば、實に悲壯なり勇烈なり、余は去三十七八年日露戰役に從軍し、略々其狀況も實験せり、然れども、开は僅々二年ならずして、ポーツマウス條約は平和締結を齎らし來り、日本は一躍兎にも角にも世界列強國と比肩するに至り、表面平和を装ひぬ、然らば戰闘は全く止みしか、否、余をして云はしむれば、世界は常に戰闘を以て滿され、瞬間の平和とても之なきなり、商業といひ、貿易といひ、皆或意味に於ての戰闘なり、然れども、开は暫く措く、余の

此處に云はんと欲する所は、吾人日常の瞬間々々が實に戰闘にてあること之なり。

凡そ人志を立つるものは千萬あらん、されども其志を遂ぐるの士は十百に足らざるなり、之果して何故ぞや、要するに其志を妨ぐる惡魔てふ事は、日夜間斷なく身邊に襲來し、吾人は之に抵抗し勝利を占むる事能はざるが爲なり、更に具體的例話を以て之を示さば、吾人學生或は社會一般の青年にとりて、美酒佳肴の如き、玉顏麗容たる美人の如き、悉く以て前途を妨ぐる魔軍たるの數を漏るゝ能はざる事、日常報ずる新聞紙の第三面を見れば思半ばに過ぎん、然れども彼等は猶以て強敵となすに足らざるなり、何となれば开は日常道徳店にて販賣する銃砲或は刀劍を以て撃除し得べければなり、從つてさのみ大決心を要し得べしとも信ぜられざればなり、然らば眞に恐怖すべき大敵とは何を意味する、人事界に現はれたる戰闘以外身體を賭して迄も、撃退せざるべからざる強敵とは何をいふか、之我祖上人が終生叫び給ひし權門てふ城壁内

に立籠る、邪師なり、邪經なり、彼等は實に本師世尊の教に悖り、現世を誤り、更に未來永遠をも過たしむる大狂惑者たればなり、さればにや、我祖上人は此の大惡魔大強敵を斃し、日本全世界の衆生をして、妙法てふ一大平和國に娛樂快樂せしめんとの堅固不拔の大信念の下に、終生戰闘を繼續し、其が爲には、伊豆伊東に流罪せられ、小松原にては前額に切創を負ひ、龍の口には斷頭臺、更に佐渡流籠の墓なき運命に接し給ひしが如き、其他の大小難枚擧に遑あらざらんも、衆生を救濟せんとの大誓願より出て給ひし聖日蓮の大決心大覺悟は、瘴霧瘴霧看て以て心に介せず、陽々些も平常に異なるなく愈々益々其法教を鳴らして已まざり。

日蓮をば日本國の上一人より下萬氏に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども今迄かうて候事は一人なれども心のつよきなるべしとあぼすべし、いゝ、いゝ、日本國にはかほき人人はあるらめど大將のはかり事つたなければかひなし(乙御前抄)

かゝる時刻に日蓮流教を蒙りて此の士に生れけるこそ時の不祥なれども(如説修行抄)

大將のはかり事つたなければの裏面には、確に上人が御自ら自己は日本國に於て眞の大將として、如何なる倭姦邪智の輩にも誑惑せられずとの、一大信念の伏在するを知ると同時に、上人は佛の詔教により、精神的大元帥として此の士に出てたりとの、一大確信見るべきなり。

如何に強敵重なるも努々退く心なく恐るゝ心なかれ頼ひ頼をば頼にて引切どうをばひしほこを以てつゝいさ足にはほだしを打てきりを以てもひと命のかよはんほどは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死するなればいゝいゝ、いゝ、我等を守護して救先の實利へ送り給ふべき也あらうれしやあらうれしや(如説修行抄)

風大なれば浪大なり龍大なれば雨たけきやうにいよゝゝあだをなしますゝゝにくみて御評定に食議あり頭をばはぬべきか鎌倉ををわるべきか弟子檀那等を

ば所領あらん者は所領を召して頸を切れ或はろうに
てせめ或は遠流すべし等云 云 日蓮悦んで云へ本より
存知の旨なり(種々振舞)

頸切らるゝことは云はずもがな、住所の安全を得ず
所領を奪はれ、剩へ遠流せられ、或は穢穢の辱を受
んとするが如き、何れか人世至極の一大病事ならざら
ん、然れども一大決心の下に立ち給ひし、精神的大元
帥聖日蓮は、利害打算の念や、毀譽褒貶の如き、瞬間
主義を超越し、毫も意に介せざるのみか、和悦以て存
知の旨なりと、何ど其精神的武士として決意の固き、
然り此の決心此の覺悟ありて初めて、上人の如き兼天
動地の大戦闘を成し得るれしなり。實に上人が弟子檀
那に對しての嚴訓としては、左の御文の如き最も痛快
に覺ゆ。

妙法蓮華經の五字末法の初めに一闍浮提にひるさら
せ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたりわかたうども
二陣三陣つゞきて迦葉阿難にも勝れ天臺傳教にもこ
へよかしわづかの小島のぬしらかをどさんををちて

法王の宜旨背き難ければ經文に任せて權實二教の軍
を起し忍辱の鏡を着て妙教の劍を掲げ一部八卷の肝
心妙法五字の旗を指上げ未圓眞實の弓をはり正直捨
權の矢をはげて大白牛車に打乘て權門をかつぱと破
りかしてへちしかけてへちしよせ念佛眞言禪律の
八宗十宗の敵人を責るに或はにげ或はひき退き或は
生取れしものは弟子となる或は責め返し或は責め落
しすれども敵は多勢なり法王の一人は無勢なり今に
至りて軍やむことなし(如説修行抄)

如何に上人が權門千軍萬馬の間に馳驅し、奮撃突戰
秘術を盡す事千變萬化なりしか、此一章に於て明々赫
々ならん、而してこは該章書寫當時の状況のみにあら
ずして、上人の終生が實の此の戰闘状態にて之ありし
ことを。

所詮は萬禱を抛つて諸宗を御前に召し合せ佛法の邪正
を決し給へ(與時宗)
との如きに至ては、上人の意氣は己に四體に溢れ、刀
杖弓矢の如き取るに由なく白刃を交へ生死を面前に決

は閻魔王のせめをばいかんがすべし佛の御使となの
りながらをくせんは無下の人人なりと申しふくめぬ
既に俯仰天地に耻ぢざるの信念覺悟を有せる上人は
大元帥としての嚴訓を部下に與へられしや知るべきの
み、乃ち自己は末法濁世の救済主として平定者として
先陣に立てる大將なるぞ、我部下たらん者は二陣三陣
と打ち續き、往昔名將勇士と呼ばれたる迦葉阿難天臺
傳教等より、より以上目ザマンヤ働きをなせと、茲に
二陣三陣との給ひしは上人當初の弟子檀那等のみを指
したるか否余は末法今時の吾人を指せるやに覺え轉た
恐懼の威なき能はざるなり、殊に小島の主 云の一
節に至つては實に上人が當時幕朝の權威に媚びず阿ら
ざりし清廉潔白の氣宇を知り得ると同時に現社會に於
て、權門の奴隸となり一片糊口の爲に狂奔せるが如き
僧俗に取り百讀するの價值ある金言なりと信ず。
上人の奮闘せられし状況に就ては御遺文中至る所と
して之を見るを得んも、余は特に余が痛切に感ぜし一
節を左に掲げん

し給はんとの大元氣大勇猛、悲壯といはんか、將又勇
烈といはんか、余は其言葉に苦まざるを得ず。

叙上に於て讀者諸氏は、上人が佛勅によれる大元帥
としての自信、精神的英雄としての覺悟及、其戰闘狀
況等に就ては、略々推察することを得しならん、然ら
ば人は單にかゝる信念や覺悟を有せる、世間の所謂強
盛、或は頑固一天張の人なりしか、否決して然らざり
しなり、儒家の孝養は今世に限る未來の父母を助け
ざれば外典の聖賢は有名無實なり(開目抄)
日蓮は日本國の諸人に親しき父母なり(全上)
現世はいふをまたず、未來永遠を救はずんば以て眞
の孝養となさざりしが如き、實に以て現世を超越した
る一大平等觀、察するに猶餘りあり、更に上人は日
本國諸人の父とし母として、愛子の正に權門邪智の輩
に誘惑せられ、今や殆ど捕虜となり終らんとするの慘
狀見るに忍びず、一身を犠牲に供し、此處に權實二
教の砲火を交へ給ひしなり、然らば上人は世間凡俗輩
の云へるが如き強盛頑固底の人にて非ると同時に、

开は大慈大悲を基礎として立ち給へる。血あり涙ある決心覚悟なりしことを、故に戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、百萬の大軍も以て支ふるに能はざる強有力ありしなり。昔に強力ありしのみならず、現はれ来る権門の魔軍は悉く塵殺せられしなり。嗚呼上人は實に精神的大元帥として無雙と謂ふべきか。

今や上人の主義は、日に月に社會の注目をひき、日蓮の聲は、西に東に如起々々として起る、蓋し精神的大混亂を來せる現今の如き社會にありては、自然の要求として實に上人の如き戰術、上人の如き大自信、上人の如き利器を用ふるにあらざれば、以て魔軍を撃退すること難く、眞の平和を期する事能はざればなり。伏して敬む、余は僧と俗とを問はず、老若男女を論ぜず、苟も眞に慰安を求め、眞の太平に住せんとするの士は、此の御遺文を體讀色讀し、内は以て一身一家の惡魔を拂ひ、外は以て一郷一國の魔軍を撃退し、寸時も早く常寂光土の顯現せられんことを。

(完)

活動の羅針盤

中原道夜

◎人生の價値

「大車に鞍なく、小車に鞍なくんば、其れ何を以てか之を行らんや」とは孔子の言である、然り、人に智識なく、理想なく、自覺の精神なく、眞の信仰なく、而して意義あり根底ある大活動がなかつたならば、何を以てか人生の價値を認め得られようか、猶大車に鞍なく小車に鞍なきが如くであらう、此意味に於ける大活動は、實に吾人の生命である、此大活動なき所は、眞に人生の價値を失却したものと云ふ。

◎聖祖の教訓

活動、此の呼びは、已に業に吾人に覺醒を促し、垂示し給ひし大慈父が在すのである、「我は是れ一切知者一切見者なり知者問道者説道者なり」との大慈父の精神より「懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ……退心ある者には不退の心を起さしむ」と説き、又「懈怠の心を生ぜざれ」と示し、「勇猛精進」して益々活

動奮闘すべきことを教へられてある、末法弘通の大任を帯びて起りし日蓮上人は、受け難き人身を受け、値がたき佛法にあひて争か虚けて候ふべきぞ」と深く吾人に努力勉勵すべきを警戒られてある、かく吾人が活動奮闘を勸誠された文は諸所の經典遺文の中に數多あるのである、されば苟も佛教を信せん者、殊に日蓮の主義を奉ずる者は、能く此意を味讀し、體現する覺悟がなくてはならないと思ふ、此の大活動のある所に社會人生の光明を認め、吾人が向上發展の進路を歩し而して希望と歡喜とに充滿て、永遠に滅しない理想を實現することが出來得ると信するるのである。

◎活動と生命

日蓮上人が「命と申す物は一身第一の珍寶也一日なりとも之をのぶるならば千萬兩の金にも過ぎたり」と申されてあるが、全體これは如何なる意味であるかといふに、吾人は活動する爲めに生命を一日も長く保つたならば、社會國家に貢献する所は、幾だ少くない、然し徒らに生命を惜んで國家の危急存亡に際しても、

自己を重んじ我身が大車だとキメ込んで消極的態度を取れよと教へられたのではない、上人は常に活動々地の積極進取の大活動主義であつて、故に此大活動の爲に生命を長くせよと誠められたのである、若し此活動があつたならば、決して悲哀と煩悶と苦痛とに滿される様なことはない、即ち活動力ある所には悲哀は轉じ煩悶は化し苦痛は去つて、常に喜びと壯快と楽しみと相伴ひ相交つて吾人の心神を妙化するものであらう、この光ある麗はしき生活は極めて神聖である。

◎吾人の本務

活動は吾人の本領を發揮しつゝあるのである、故に吾人が、自己の本領を發揮し完成せんとせば活動せねばならない、全體人の最も大なる苦痛と思ふものは何であらうか、病か、老か、死か、離別か、貧か、不遇か、抑も何であらうか、以上のもの皆苦たるを免れない、然し、吾人は未だより以上の苦痛がありはせぬかと思ふ、曰く責任を果さいと、是である、此責任を果さなければ自己の本領を全ふするに能はざるは勿論

てあらう、日蓮上人が「生前を安し更に没後をたすけん」と申されたのも、即ち此意味ではあるまいか、必ずしも未來に偏せず現世に執せず現當二世に亘つて永久常恒でなければならぬ。故に現社會の人類としては其本務を全ふじ、而して未來常住の理想を完成する事が吾人の要務と思ふ。

◎何ぞ覺醒せざる

然るに、此意を自覺せざる輩は、徒らに現實界に囚はれて、常に醉歩踟躕して花に戯れ、放歌高吟して月に舞ひ、一生空しく悠遊して、何等世に貢する所なく、猶蠢然たる一蠶として了らんとして居る、實に憐むべきは渠等醒生夢死の徒である、而も彼等は得々然として倫理は畢竟理屈に過ぎずとなし、道徳を重んぜず法律は自由の束縛であると語り、宗教は一種の空想若くは迷信なりと罵り、只最も愉快と感し自ら可なりと是認して居るものは、酒樓に豪飲し待合に流連し娼婦の粧を見、媚笑の聲を聞き、巫山戯廻ること、是である、彼等は果して之を永久の快樂と信して居る

らう、此「パン悶者」は實に薄志弱行の漢である、然るに是等の三面記事が益々多くなるといふのは、寒心すべし現象ではあるまいか、蓋し彼等は此現實を賤め理想のみ大なるを欲して、真面目に活動せんとする勇氣を失へる者である、即ち理想を現實の外に求めんとして居る弊である、若し法華經主義の信仰を得たならば、其光明に依つて、活動の力を得ずには居られまいと思ふ

活動—、活動—、これ抑も何を標準とすべきか、活動の意は太だ狭くない、されば其羅針盤となるものは何であらうか、曰く正義の活動、これである、

◎正義の活動

正義—、正義の活動—

これ吾人活動の羅針盤である、「我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大綱とならん」とは誰の叫びであらうか、この偉大なる確信と抱負とを有して居るものは誰であらうか、即ち末法弘通の大任を帯び佛敎統一を自任し、久遠本佛の素懷を稟け、本化

のであらうか、何ぞ彼等は反省自覺の精神を喚起せないてあらうか、

◎何ぞ光明を認めざる

又或者は、餘りに現實社會を輕視し、悲觀厭世の境に陥つて居るものがある、渠等は曰ふ、人生宇宙の問題を解決せんとして研鑽し思索し勉強しつゝあるけれども、到底理性の判斷の及ぶ所でない、人生は寂滅である、「ツマラナイ」大嘆息を吐かざるを得ない、吾々は如何しても人生は懷疑？、不可解？、である、如何しても煩悶せざるを得ないと語つて居る、思ふに渠等は果して宇宙人生の問題を解決せんとてつゝあるか果して彼等は人生の齋趣を求めつゝあるか、眞の佛、眞の神、絕對者、眞理その者、憧憬せんとしつゝあるか、或は全くそんなものが無いとは斷言せられない、が然し多くの所謂煩悶者なるものは、決してそんな高尚なる所から來たのではない、戀愛の結果、不遇、事業の失敗等、要するに多くは生活難より來るものである、彼等の煩悶たるや寧ろ「パン悶」と云ふべきであ

の佛勸を蒙りて、我大日本國に妙法を宣傳せし、日蓮上人その人である、實に上人は法華の正法を信得して偉大なる力を發揮せられたのである、而して上人の信仰は智的に偏せず情的に流れず健全なる合理的信仰である、守護國家論に「如來の滅後二千餘年の間、佛敎に邪義を副へ來り萬に一も正義なきか」と道以「此等は皆譯者人師の誤也」と喝破せしが如き、又開目抄に「智者に我義破られずば用むじと也」と堅く誓ひしが如きは、如何に上人の信仰が正義に重きを置かれて居つたかが窺ひ知らるゝと思ふ、

上人が一度この正義の信仰に住してより、法華經の爲めに身を捨てんことは、日來月來の覺悟である、今更難に遇ふことを怪むべきでない、此の首を捨て、佛果を成ずる事は、恰も凡瓦に玉を換ゆるが如きものであるとの不屈不撓の大確信と確固不拔の大信念に住し如何なる難や迫害をも事とせず、從容自若として恐れなかつたといふのは、到底普通の人では思ひやられな

非常に喜ばれた、要するに上人は、活動の羅針盤を法華經の上に認め、正義弘通の大任を擔ふて起られたのである、故に迫害や誹難は何等の反動もなかつたのである、

◎凡そ人としては如斯時固不拔の大精神が必要である決して日蓮上人の過去の話として輕視すべきものではない、この活ける奮闘の大努力大活動は、最も我國民としての好模範であらうと思ふ、世には自己を利する爲には難を懼れず苦を忘れて奮勵する事もあるが、若し然らざれば我不關焉とキノ込む人がある、此れ畢竟正義の信仰なき我利々々自者の漢である、少くも上人の如き信仰即ち正義の爲には如何なる大難や迫害に遭遇するも不屈不撓の精神があるならば、社會公衆の爲には、時處の如何に依つては自ら犠牲となるといふ大義心もなくてはならぬと思ふ、然し正義と伴はざる義侠心は、或は五衛門的のものとなる憂がある、故に何れの方面に於ても正義を無視しては斷して不可と信するのである

嗚呼正義の信仰！この活動を繼續する者の前には、深大なる本佛の思寵を蒙らせ給ひ、光輝ある聖祖の遺情を垂れさせ給ふのである、

彼の物質的文明の濁流に漂はされ、その渦中に呻吟せるもの、生きて、正義の信仰に住せよ、然らば汝は永劫に滅しない樂しみを得るであらう、正義の信仰に住し本佛の慈悲に接觸したる其處に永遠盡くことなき眞の喜びと生命と自由とを得られるのである、これ難きにあらず、遠きにあらず、吾人が活動しつつあるこの實社會に處して求め得らるゝのである、是即ち本佛の光顯し給ふ壽量品の説相である、(完)

我徒の抱負

佛法王法の大義名分を明らかにし、これに依りて人道に貢献し、眞の平和自由幸福を増進せんとするは、所謂日蓮主義の本領なり、これを顯本的一主義とす、されば日蓮主義は統一主義なり統一主義は即ち日蓮主

而して此法華經觀の上よりすれば、宗教と徳の百般の事と衝突する様なことは決してない、日蓮上人が「御みやづかひを法華經とおぼしめせ一切世間治生産業皆實相と相違背せずとは是なり」と申されたる文は、實に能く此間の消息を遺憾なく統一されてあるものと思ふ、若し此法華經主義の上より觀れば、凡て此に歸着點を確へて居る、此れ吾人活動の羅針盤となるものである、其活動しつつあるものは幾多方向を異にして居る様であつても、最後の大目的は一である、否かく秩序あり統一ある大活動がなかつたならば、眞に吾人の本領を自覺し、社會の向上、進化に効果あらしめ、國家の隆盛を謀り益々國威を宣揚せん事を期するは正しいことと思ふ、

嗚呼正義の信仰！この活動は吾人々類の向上發展の光明である、此光明は未だ覺醒ざる者に自覺の精神を奮起せしめ意義ある人生の理想を實現せしめ一切不善の闇を照破して國土安穩の凱歌を奏せしむるものである、

義なり、それ、宇宙人生の秘事を光顯せんとせば、その本源を顯さざる可らず、若しこれを捨て顧みず唯だ枝葉に拘束して事をなさんか、吾人が希望する所の眞の自由平和幸福は、何等得る所なくして、失望に了らん、世間言行のそろはざる者を指して「偽善者」といふ然れば教義の根底脆弱にして誇張の言辭を弄するは則ち偽善的宗教なり、日蓮主義は教義の根底と其の行相を明かにし、而して法の正邪是非を批判し以て顯本的統一を宣言す、その意に隨く疑の如くせざれば、正法光顯佛日増輝天下安寧の理想を現實にする能はずと、これを立正安國論に賭るも、これを其の他重要な祖書に徴するも明々白々として、一點の晦澁なし、而かも此の主義を弘布せんとせば、その奮闘耐久の勇氣を持續せざる可らず、「身輕法重死身弘法」の訓諭は吾人統一主義を奉戴する者の、身に當るの信心なり、今や信教自由の聖世に遭遇す、豈に安閑として坐食すべき願くは此の主義のために犠牲となり、人道に貢献するの實を擧げんことを、これ吾人同志の誓願なり、これ

統一主義を宣傳する者の本領なり、此に誓願と本領を表白して、人生救済の根本策は、善良なる正義の教法に従順せざるべからざる事を、認識し共に本佛の慈光に浴し、聖祖の指導を便に、吾人信行の活力を現はさんことを、祈るものなり。(筵堂)

寄書

憤悻録

▲鑽仰天晴の意義及び其語原▼

▲願は各地研究会を一統せむ▼

影山謙二

名は實の資、又は大義名分と云ふこともある、何事に限らず「名」ほど大切なものは無い。近頃、日蓮上人の主義及び人格を欽慕し其の教義を研究する目的を以て、都鄙各方面に種々の團體が出来た、が、凡て斯かる種類の團體に附すも名稱を撰定するに就ては、内外二個の肝要なることがある、外は一般世人をして一見

明瞭に團體其もの、抱持する大趣旨を知領せしむること、又内は團體員全體が最も敬虔の至念に住して撰銘を慎重にした迹が長へに傳はる處に留意せねばならぬと思ふ。

昨年組織せられた東京の「日蓮鑽仰天晴會」、其後作州津山に出来た「日蓮鑽仰津山天晴會」の如きは事體兩ながら最も高妙に銘名せられて居ると懐ふ。昔し去る哲人が「妙」の一字を諧戲卑近の言葉に解釋して「妙と云ふ字は若き女の亂れ髪、いふにいはれず、とくに解かれず」と云ふたが、斯の「鑽仰」と云ひ「天晴」と云ふ是等の熟字や成語を鈔出し來つて會名に賦與し得たのは、實に妙中の妙なるもので、絶へて不思議に、固とに言ふに言はれぬ善き名と成つて居ると信するのである。

試に、單に普通の字義から「天晴」の二字を見るも、先づ天晴の天は、道徳的及び人格的の意義に於て謂へは、天とは高さ處てそらの頭上にあるより戴くの意て又萬物の主宰、宇宙の精力、乃至又真理、正義、無上

道の義もあり、又佛の「切利天」、「非想天」、「無雲天」「種民天」等の語に因を持つのみならず、易に「樂天知命」とあり、其他人事の上にも「人天」とか「所天」とか總て戴き敬ふの義があるから、何れの方面から觀察しても、實に眞善美の三意義を含蓄代表した處の、またと他に取り替へ無き善き文字である。次に天晴の晴とは雨止み雲散したる後ちの象で、もの明かなること此上なしとの義である。ツマリ「天晴」は我祖日蓮上人創始の造語であると同時に、其意義、期せずして眼暗の間に、的爾、上人の聖徳を風彰顯現せられたかの如く感せらるゝ點もあり、旁々以て實に善き熟字と成て居ると懐ふ。加之、況んや此の天晴の二字に對して對句と成て居る「地明」の二字とは、上人が本化佛教特有の大歸趣を、社會有衆に宣示顯說せられた處の觀心本尊抄面かも曾て我國の文壇中、千古萬古、未曾有の大文章なりと、高評激賞せられつゝある觀心本尊抄に於て、最高最妙の教旨教義を含蓄せしめられたる文雅優妙の文句なるに於ておやだ。

却説又、「鑽仰」の二字である、之の語は「論語」に有るので、孔子の門人諸子が、其師孔子を欽仰慕慕するの餘り、孔子の盛徳を、物に喩へ事に拵して種々様々と感歎敬稱して居る、其内同門逸足の高弟たる顏淵は「顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、勿焉在後、夫子循々然善誘人、博我以文、約我以禮、」とあつて、即ち「仰之」「鑽之」と謂たのが此の熟字の語原である。殊に鑽仰の鑽は、物を深く穿ち入て事をみがき修めるの義を有つ字で、又鑽仰の仰は、慕ふ、敬ふ、あふ々とも進む字で、支那では曾て孔子を尊仰して「孔子雖無位、其道可尊、使萬世景仰」と云ふた事がある。何れにしても聖愚相對する場合に使用し來つて、兎角縁故の深い語である。斯く字義を討ね、典故を追ふて詮し來れば、「日蓮鑽仰天晴會」てふ名稱は、高遠なるか上にも高遠に、奥妙なるか上にも奥妙に、善美なるか上にも、善美に洵に近來稀に見出し得たる「會名々彙字典」中に於ける優の優なるものだと思ふ。

そこで予は、我聖祖上人の道に志ある、全國各地の信友及び道契諸士に對して一つの相談がある。我聖祖立宗開教の綱紀は、徹頭徹尾、一天四海皆歸妙法、闡浮提內廣令流布て。其宗風は、異體同心、二陣三陣相呼相應て。其態度は、所動的で莫くて實に大々的の能動的で。我等日々に進撃しつつある軍旅の前に横つて居る敵の輩らは、權門分裂の諸宗と、内起外來の邪教としてある。ナレバ是等の輩情に臨むの前に、先以て我等の期して守らねば成らぬのは、節制あり紀律ある統一の下に、嚴肅齊一の宗紀を皇張することである。尤も這般の問題は、所謂「宗教政策」上の大問題で有て素より其情勢として一朝一夕に定め得べきものは莫からう、が、其内にも、セメテ我々同志の間に於ける幾多の團體の名稱丈けなりとも、統一的に改め度いと念ふのである。

茲に於て予は進て曰ふ、今や各地に勃々乎として起りつつある、日蓮研究會、或は地明會、或は日蓮鑽仰會、曰く何會、曰く何團等の類が、各々個々に名を附

して區々に稱を異にせんよりは、寧ろ此の美はしき名稱に擁立せられて、而かも其組織の基礎は國民的に、其包容は字內的に、凜乎として出來上りたる東京の「日蓮鑽仰天晴會」を盟主とし、本據し、須らく各地之に相次ぎ相應して、二陣三陣百陣千陣と、一大法戰の陣形を字内に張翼し、其個々團體の所在を一見明瞭に榜示するか爲には、宜しく各其地の地名を挿て天晴會を名稱し、且つ其實體に至ては、恰も之を人身に譬ふれば、大動脈あり、支脈ありて幹支相通し時々刻々に血液を循環して五體に營養を供給するか如く、東京の天晴會を之か幹とし、各地の天晴會を之が友とし、以て幹支應呼の間に活動的生命の關係聯絡を維持し、威風齊々、旗鼓堂々、王師の胡敵に臨むが如く、本化實教の大權を以て權門折伏の節刀を行る、豈に愈々快々の盛事ではあるまいか。聊か所思を述べて滿天下の同志に啓るのである。

報 道

富士山は三國に跨りて雄姿堂々世界の中心として誇る所なるが、宗務總監野口日主師は、千葉縣に東京に京都に、その活動目醒ましく、人をして瞻仰する能はざらしむ、而して舊冬遠江參河所在寺院の懇情を容れ、布教師鈴木孝碩師を隨行として、各所に宣教演說せら法益甚大同地方に於て嘗て見ざる効果ありしといふ、朝香生より詳細報道ありたれば此にその梗概を掲録す十月廿九日、午前十時二川驛着、妙泰寺信徒惣代、山本惣一郎、渡邊市兵衛、南氏の出迎を受け、同十一時來白、當地は秋收多忙の爲め夜分開會、高橋遵碩師は世話人に命じ數百枚の案内狀を配布されければ點燈後早や二百餘名の參詣者あり、野口僧正導師にて讀經後直ちに演說會に移れり

開會の詳
文明園に通ずる宗徒とは何ぞや
情勢に就て

高橋遵碩師
鈴木孝碩師
野口日主師

當夜參詣する者役場員學校教職員其他男女三百五十名余、各辨士の特長と識見とに多大の法益を蒙り十一時頃散開せり
○婦人會の改名 日當山には從來開山講と稱し婦人を以て組織せられ、會員凡百七十名は春秋二期寺に集り唱題後高橋遵碩師の法話を聴くを常とせしが、今回布

教師の御遺教を紀念として演名婦人會と改稱せり、向今後一層本會の發展を期し會員を募集する由にて宗家の爲慶すべき事なり、

十月卅日、野口僧正の一行は妙立寺着、當山は開祖日什上人直建立の由緒ある寺院にして總て本山等の巡廻には必らず晝說教を勤むる山規なりしが、今回は特に農事の都合午後七時開演、山主牧田師は寺務繁忙の爲め坊主野中師代理にて開會の辭を述べらる

開會の辭
心の師となる其心を師とせざれ
鈴木孝碩師
野口日主師

清水朝倉野中の三師等準備に奔走せられしを以て來聽者殆んど四百名、さしも廣き堂内も立錫の餘地なく縁側に立ち寒風をも忘れ熱心に聴きつゝ、あらし純信者も見受けたりかくて十一時過ぎ芽出度開會、翌日野口師は巡廻紀念として左の名句を詠まれたり

延象山
開祖師の清き教へに潤ひて

草木の色もいやさかへ都、
又年既に六十有餘歳の一翁、辨士の熱心なる卓説に大に感ずる所ありてか、その翌朝左の名句を贈られたり
くらのうちの。たからにまざる。このること
やけずくちせず。ぬすまれもせず。

野末助丸翁

○女人講の改稱——吉美一ヶ村は殆んど妙立寺の檀信徒にして、當寺には從來凡そ六百名より成る女人講ありて正五九月には必ず寺へ參詣し題目を唱へ信仰を向むるを例とせしが——今回巡教の結果、顯本婦人會と改名し大に活動せんことを誓ひ且明年度よりは會員交代にて本山へ參詣する事を約せり

○日什上人舊跡——卅一日、清水一老の案内にて布教師は什祖舊跡に參拜讀經せられしが偶々記録を得たれば讀者諸賢の參考に供せん爲め左に掲載することとなしぬ

明徳三丙寅年開祖始めて此地に御着の時十二月廿六日より正月迄越年庵室の靈跡也爾後廢跡に就く廿四世日量代享保二丁酉に至て再び荆蘇を披き小塔を立つ爾來毎年正五九の廿八日山主并に一山の大衆法樂に行くを例とす此地所は檀頭佐原五右衛門所有の所明治廿六年癸巳三月永く妙立寺へ寄附す立木は一切佐原伊平にて買求し此又永く伐採せざる約定を以て寄附し地所共に寺有となる也

十月三十一日、太田妙安寺布教、時計七時半を報するや野口僧正導師にて修法し八時より演説會に移る、

開會の時

忍耐と傳教

寺主

野口日主師

佛法堂

野口日主師

當寺は檀家僅かに六十余戸なるも豫て西山師の寺院經

勤王主義と法華經

野口日主師

山主石塚師は老體殊に病後をも顧ず東奔西走盡力せられしかば聽衆凡そ三百名、極めて盛會なりき石塚師は信仰堅固且つ慈悲心深く特に先年山中良藏氏出版物に多大の資を投じ本宗僧侶の爲に施本せられし奇特の人なりと

十一月二日、田原當行寺布教、當寺には顯本教會なるものありて毎年三月に修行ありしが、本年は都合上延期せしも今回此奉に與り午後一時より野口僧正導師の下に全會の法要を勤修し、午後二時より演説會を開催せり

開會の時

活ける信仰とは何ぞや

寺主

前田圓整師

時事所感

鈴木孝碩師

午後七時より

日

野口日主師

時愛の光

鈴木孝碩師

美しき生活

野口日主師

天長の佳節にて來會者頗る多く辨士は尤も懇切に尤も周到に演べられければ僧俗を問はず耳を傾け聽せり其功果無量饒益甚大、十一時半芽出度閉會せり翌四日野口僧正一行は當地布教の任を一先づ終り、前田師及び惣代數名に見送られ風中を事ともせず名古屋へ向はせられたり

○夏期講習會——今回野口僧正等の御巡教の功果無量

營と信仰革正とに因り法を求め來り會する者百五十名余、頗る盛會なりき、演説後野口僧正の發議にて佛教青年會を當山に設立せんことを決せられし結果、毎年一回本多大僧正及び野口僧正を請待し正法興隆の爲め布教せらるゝ由

十一月一日午後一時妙圓寺着、同夜布教、遠近の檀信徒集ひ會するもの數百名、就中三四里の遠路も尙道を求め法を聞くには遠しとせず參堂して一行を歡待しつゝあるものもありき、聽て鈴木師は『愚安の生活』野口師は『身讀法華』の題下にて卓説雄辯を揮はれたり、尙午後八時より演説會を開催せらる

開會の時

正信とは何ぞや

有本道妙師

鈴木孝碩師

開顯主義

野口僧正

各辨士は熱心に本宗の教義を開顯し主義を鼓吹せられしが來聽者波多野陸軍大佐を始め紳士學生市の有力なる信徒二百余名は皆歡悅に滿ち或は快談を叫び或は題目を唱ふもありて未會有の盛會なりき、尙明年巡教の砌には當寺にも青年會を設立すべく白井師と約せり因に今回の布教に對し住職白井師を始め世話人等は特に盡力せられたり

十一月二日、野田法華寺に於て午後七時より開催

開會の時

人生第一の寶

寺主

石塚日主師

鈴木孝碩師

饒益多大の結果、來る四十三年五月、濱名湖畔に於て五日間講演會を開催し講師には本多管長親下及び宗務總監野口僧正其他名師を請待することに決し準備員として西山高橋清水等の諸師盡力せらるゝ由、宗家の爲め將た遠參僧侶の爲悦ぶべき現象にあらずや

○久留米市本泰寺庫裡は建設已來數百年の星霜を経たるを以て頗る腐朽に屬し其の居に堪へざりしが寺檀一致協力昨年冬より庫裡改築を思立しが住職吉塚通榮師檀家總代人諸氏の丹精に依り此程庫裡再築切成りたるを以て前任山本通辨師を請し去る十二月三十四

兩日間成滿式法要を厳修したり同日は檀家總代人平岡藤助氏の祝文平岡保太郎氏の祝文山本通辨師の祝文同師の法話等あり法要終りて檀信徒一同へ折詰の饗應あり兩日共各自十二分の歡を盡して散會したり山本通辨師には此の法要終り筑前地方へ布教として出發せられ諸所の布教終り同月廿一日歸山せられたる由

○和氣洞信會の歲旦備前和氣本成寺に於ては元旦午前六時半同信會員五拾餘名參堂七時より國運隆盛の祈念法要會を嚴修し八時より客殿に於て祝盃を擧げ各自法談懇親漸くにして三唱萬歳終て十時一同和氣小學校の拜賀式に參列原田師及會員惣代恒次傳之助君の祝辞演説を爲し十二時半齋然として散會したり

因に來る十五日には顯本婦人會の新年會を開き餘興福引其他種々催す等なり

▲柿屋店主の死去

當市上の町柿屋本店主商業會議所議員久城茂太郎氏は今月七日穿孔性腹膜炎に犯され即日岡山縣病院に入院加療せし其効なく九日午後九時死去したるが氏は性温厚にして快潤新進の氣風に富み常に實業界に貢獻する所少なからざるのみならず顯本法華信徒として見るべきものあれば左に少しく記せん

▲實業家としての柿屋店主

氏は伊三郎氏の長男にして明治七年十月十五日岡山市野田屋町に生る十一歳父に隨ひ商品仕入の爲め上阪し單獨商業界に身を投せしは十四歳にして十七歳の時父を失ひし以來拮据經營二十年柿屋今日の名譽を致したるがその商業界に貢獻せる顯著なるものを擧ぐれば岡山泉服商組合はその首唱にて組織され從來の弊風を革め總て正札附となしたり始めて當市に陳列場を設けたるも氏にして爾來當市に於ける店頭裝飾に一新紀元を劃せり當市商人年中行事の一たる誓文拂の企畫も賣出の卒先も實に氏によりて成されたるが誓文拂は漸次に縣下の各地に普及されたり或る歳賣出しを爲するに當り當市に於ける廣告屋の元祖秀丸をして大に市内を廣告せしむる事としたるが當日雨降りて流石の秀丸も陸阻遠巡せしかば氏は奮發奮勵フワックコートを着し降り頻る雨を犯して先頭に立ち市中を練り歩きたれば大に注目されたる事あり又雜誌「新流行」を發兌し流行趣

味を一般に知らしめ一面自家の廣告に利用せしが如きは優にその商智に長けたるを見るに足る

▲佛教徒としての柿屋店主

氏最も顯本法華の信仰に篤く人に向つては法華の弘通を説けり殊に布教傳道に援助を與へしことの多大なるは市人顯本法華宗と稱して「柿屋のお宗旨」と云ふものあるに徴して知るべく總本山京都妙満寺の信徒總代たり去秋當市山崎町本行寺の庫理改築の舉あるや奔走最も昂め遂に克く其の工を成さしむ氏は酒間尙ほその念頭を去らざるものは信仰と商業とにして興到れば宗教を語れる由にて其の臨終の極めて堂々たる態度は尙ほ醫師の語頭に殘れり聞く氏病んで入院するや尊信する本行寺住職能仁事一師その請により常に身邊を離れず菅院長、坂田博士、ドクトル齋藤、岡西、野上の兩國手立會腹切開の大手術を行へるが豫後不良到底不治なりと主治醫より宣告あり能仁師は諒て氏より不治なれば必ず告げらるべしとありたれば約の如くせるに氏之れを了し徐に後事を託し靜に唱題誦經一糸亂れず賑擣に何等異常なかりしは醫員の皆驚嘆せし處にして衰弱の結果心臟麻痺を起し遂に九日午後九時安然笑を含んで逝けりと氏四男四女あり長男信一郎氏業を繼ぐ三男四男は僧と爲さんとし現に三男國三郎氏は能仁師に養はる以て氏が篤信家たるを知るに足る氏が葬儀は來る十五日午後二時自宅出棺山崎町本行寺に於て讀經の機墓地向ふ管なり氏享年三十六惜むべきなり右に就

き葬儀は十二月十五日午後二時本行寺に於て執行せられ菅長本多大僧正は井村法務部長を従へられて來岡あり院下大導師を遊ばされ嚴肅なる法要を勤修せられ會葬者千有餘名如何に氏が生前の徳行の深きを追想せしめたり

○京都通信西村うた子氏の死 京都本山國光婦人會の爲めに多年盡力せられたる京都の名門西村吉右工門氏の母堂うた子氏は七十二才の高齡を以て去月七日長逝せられたれば野口僧正及山内近末寺院住職によりて本山に於て莊嚴なる葬典を擧げられたり會葬者千有餘野口僧正の印導、田上寂光寺貫主の歎徳章朗讀ありたり

○西東吉右工門氏の篤志 京都の名門西村吉右工門氏は總本山妙満寺の大檀越にして常に信仰に篤き人なるが今回母堂逝去に際し其菩提の爲として野口僧正には紫七イゴ地の長絹及五條其他山内近末寺院十余名に夫々五條一帖を贈られしは寄寫と云ふべし

○會津妙法寺副住職竹内無着師 は妙法寺本堂再建勸財の爲め關西地方へ出張せられたるが京都、大阪、姫路、岡山、和氣、津山、伯耆廣島地方にては何れも開祖の御靈跡なるにと竹内師の熱心なる勸募とによつて成績良好の由なるか同師は十二月五日京都出發せられたり

○聖祖門下同志會

京都日蓮宗各派に依て組織せら

れたる同會は中村寬澄、川崎英照、岡村日晴師の常置員は任滿ちて辭職せしを以て布日潮深、鈴木孝碩富谷旭雲の三師當選し來年度の發展を期する由

○千葉縣聯合布教師會 十月八日同例會を縣す大綱町蓮照寺に開會せり當月出席僧員としては稻葉管事を始とし大野天義渡邊堅冲石川憲恕板倉造益井澤宗俊石井寬俊の數名職者數十名にて極めて實力ある効果ありしを認む演題及講師は

- | | |
|------------|-------|
| 開會の序 | 小竹 俊雄 |
| 觀心本尊抄の一節 | 森川 會殿 |
| 法華經と二宮論 | 井口 善叔 |
| 處世の用心 | 渡邊 乾敏 |
| 至孝日顯 | 伊藤 實樹 |
| 懺悔に就て | 森川 寬行 |
| 雜一阿含の一節 | 中村 乾信 |
| 道徳の權威 | 秋葉 日慶 |
| 宗教とは何ぞや | 横山 會卓 |
| 善來を重すべし | 夏目 智誓 |
| 門外の所見に就て | 廣部 永眞 |
| 法華初心成佛抄の一節 | 今寺 日晝 |

新年の佳慶芽出度申納候

本多 日生

顯本法華宗宗務廳

賀正

野口 日主
井村 日成
藤崎 通明
三上 義徹

賀正

今成 乾隨
鈴木 日雄
山岡 會俊
中村 乾信
井口 善叔

恭賀新年

今成 乾隨
關田 養叔
井村 日成

顯本法華宗大學林

統一團編輯局

謹賀新年

山根 日東
笹川 眞應
國友 日斌
梶木 日種
石川 顯隆
松尾 忍水

謹祝新禧

天晴會

謹賀新年

總本山妙福寺

野口 日主
銀井 乾升
鈴木 孝碩
川崎 英照
森 義觀

賀正

寂光寺
久遠寺
田上 寛靜
坪永 日監

顯本法華宗大學支林

恭賀新年

齋藤 海叔
木村 乾中
森川 寛行
小幡 親正
土屋 眞容
大津 賢淳

賀正

教學財團

謹賀新年

野老 乾爲

恭賀新年

能仁事一

賀正

大橋 日襲

賀正

原田 容廣

賀正

山名 木信

賀正

會津妙法寺
坂本 日桓
竹内 無着

賀正

千葉縣布教師會

（右）の頁をこ翻用せしが如き

謹賀新年

大川 日教
河野 乾中

賀正

品川町
淺尾 清造

賀正

成島 泰行
秋葉 日虔
萩原 啓門

賀正

高田 日暢

日宗專門御用法衣所

民事訴訟事務の依頼に應ず

辯護士 從六位 柴崎守雄

東京日本橋區通三丁目五番地
(電話本局三千百十七番)

恭賀新年

各御本山御用達
村雲御殿御用達
宗務 廳御用達

草木伊助本店

電話七百三十五番
振替口座一五五九番

東京下谷區南稻荷町四番地
同御用達
京都衣棚通三條上ノ
西陣生織物部
草木伊助支店
草木伊助支店

會津妙法寺本堂再建寄附金申込廣告

(第七回)

金三百圓也	烏取縣	市橋 龜藏
金一百五十圓也	十五教區妙立寺代表	野老 乾爲
金一百圓也	本行寺代表	能仁 事一
金一百圓也	廣島縣本宗寺院代表	大橋 日鏡
金一百圓也	京都	西村治兵衛
金五十圓也	全	西村吉右工門
金四十圓也	全	瀧野喜八郎
金三十圓也	十四教區蓮成寺代表	梶木 日種
金二十五圓也	十二教區法華寺代表	西山 日諭
金二十四圓也	十教區法華寺住職	渡邊 元教
金二十圓也	十二教區妙松寺	土屋 正賢
金二十圓也	京都	秋山覺次郎
金二十圓也	全	長島卯一郎
金二十圓也	全	吉川平兵衛
金二十圓也	全	内田 誠次
金二十圓也	全	高橋 運領
金二十圓也	全	石塚 日綠
金二十圓也	全	妙立寺檀中
金十五圓也	十數區本壽寺	中田 量叔
金十五圓也	十五教區妙善寺住職	野口 會英
金十五圓也	十四教區堂閣寺代表	古谷 養真
金十五圓也	京都	富岩 榮七

會津妙法寺本堂再建寄附金申込廣告

(第八回)

金十五圓也	全	秋山嘉兵衛
金十圓也	全	田上 寛靜
金十圓也	全	田中ハル子
金十圓也	全	三田村義俊
金十圓也	京都	弘田 八助
金十圓也	全	北村 通正
金十圓也	全	窪田 純榮
金十圓也	全	導師用經机 一脚
金十圓也	全	十四教本立寺住職
金十圓也	全	本正寺
金十圓也	全	十五教區本壽寺代表
金十圓也	全	山名 木信
金十圓也	全	山本 通辨
金十圓也	京都	坪永 日盛
金十圓也	全	吉田ツル子
金十圓也	全	西山 定吉
金十圓也	全	上原 京子
金十圓也	全	森口 勝助
金十圓也	全	中島 定助
金十圓也	全	瀧川 儀助
金十圓也	全	中村 藤兵衛
金十圓也	全	森 喜兵衛
金十圓也	全	高田 定次郎
金十圓也	全	橋本 藤七
金十圓也	全	米田 善次郎

統



第百八十八號